

60歳で小説家になる。 森村誠一

小説家にとって感性は、非常に重要な要素である。作品の完成度や、方向性に多大な影響をあたえるからである。

感性は絶えず磨かなければ枯れるのが早く、劣化していく。

感性の劣化を防ぐには、常に好奇心を維持し、新しい文化との出会いを心がけることが大切である。足腰が弱くなって外に出られなくなっても、居ながらにして触れられる本、映像、絵画、音楽など、創作芸術にアクセスする。

感性は磨けば磨くほど光ってくる性質を帯びていると同時に劣化も早い。

ベストセラーになった作品は欠かさず目をとおすようにしている。

また、タイトルや新聞広告のキャッチコピーをみて自分の感覚に引っかかるものは必ず読んでみる。斜め読みでもポイントは決して逃がさない。ジャンルの現在の自分と同じ傾向であったり、小説家としての感性が似ている作品は、匂いあるいは潮騒のようなものが嗅覚、触覚をとおして意識を刺激する。

これは長年、本に親しんでいる経験の蓄積がもたらす効果であろう。

ただし、優れた作品に出会うと、こちらが圧倒されて無気力になることがある。これは自分には書けないのではないかと落ち込んでしまうのである。

そのうちに、プライドと敵が心が湧き上がってきて、負けてたまるか、さらに上をいく作品を書こう、という発条に変わるのである。

題材に対応する小説のタイプは、三つある。お屋敷型と建て増し型と、ワンルーム型である。

ワンルーム型は、主に短編小説である。生活に必要な設備がひとつとおり揃っているのと同じように、小説としての構成が簡潔な中にきちんと完成されている。それだけに読者の目が厳しい。

長編小説は、書き始める前のプロットの立て方、つまり建物の設計図によって分かれる。

小説家のスタイルによって個人差があるが、私は連載小説の場合、設計図を描かないことが多い。登場人物が勝手に動き出すという現象が起きやすく、設計図が役に立たなくなるのである。

逆に図面にこだわって忠実に建てようとする、登場人物が縛られて、面白さが減殺される。特に連載小説は青写真を描かずに、見切り発車するほうが向いている。

書き下ろしの場合は一か月から二か月くらいの短い期間に仕上げるので、お屋敷の間取りを考える。精密な設計図を描いて、一気に完成に書かないと書き下ろしの身上である気合が抜ける。

お屋敷型の典型は、「忠臣蔵」である。

主君が理不尽に一方的な裁決によって処罰され、家来が仇討ちをした、という設計図が出来上がっている。その枠内で、小説家それぞれの解釈、イメージや発想により部屋割りをしていく。勝手に枠を壊せない。

一方、「新撰組」は建て増し型である。

試衛館というおんぼろ道場に集まった若者たちが、「天下に名を成したい」という鬱屈した野望を抱いて、京都へ向かう。その先はまったく見えていない。行き当たりばつりに都へ上り、清河八郎に騙された後、会津藩に預けられて箱館まで転戦する。そのストーリーの流れは、移動と共に積み上げられていく、まさに建て増した部屋の集合体なのである。

人間の心理を掘り下げていく純文学作品には、設計図は必要ない。人間は気分や考え方が変わる。論理性、物語性は求められず、意識の流れと共に構成される。

本格ミステリーはお屋敷型で、緻密に作り込まなければならない。竣工したときには、論理的にすべて解決されていなければいけない。ハプニングやアクシデントの入る余地はない。

主人公が勝手に動き出してよいのは建て増し型なのである。たとえば、主人公が旧友と街中で偶然出会い、喫茶店に入る。そのとき、なぜ喫茶店に入ったのかという理由は、純文学では無用である。

本格ミステリーでは、その喫茶店を選んだ必然性が語られなければならない。